

◆19:15予定

能 船辨慶  
狂言 鬼瓦  
一調 蟻通

番組表  
●17:00～  
●ご挨拶  
●能の解説  
●17:30～



第7回  
2022

# ありとほし薪能

蟻通

歴史文化遺産都市・泉佐野

ありとほし薪能プログラム ◆令和四年九月十九日(月) 開演：午後五時／終了予定：午後七時半

## ご協賛ご芳名録

■順不同■敬称略■令和4年9月9日現在■

国際ソロプチミスト-大阪りんくう  
国際ソロプチミスト-大阪りんくう  
国際ソロプチミスト-大阪りんくう  
国際ソロプチミスト-大阪りんくう 新田谷商事株式会社  
国際ソロプチミスト-大阪りんくう 角谷織物株式会社  
国際ソロプチミスト-大阪りんくう (株)藤原製材所 住宅部  
国際ソロプチミスト-大阪りんくう 銘菓創庵 むか新  
国際ソロプチミスト-大阪りんくう 阪口 ゆみ子  
ホテル日航関西空港  
阪南チーズ染晒協同組合 甚野 治  
泉佐野の歴史と今を知る会  
特定非営利活動法人 泉州佐野にぎわい本舗  
(株)フリゴ 西願 廣行  
矢野会計事務所 矢野 哲夫  
山本紙器株式会社 九鬼 敏浩  
株式会社丸六 神藤 信六  
浦田会館 浦田幸造  
株式会社 ブティルウ 長田 和人  
南薬局 南 慎一  
泉州さの 北浦呉服 北浦 基次  
関空メタル 脇田 拓也  
(株)八幡自動車工場 清原 健  
(株)スミヤセンイ 角谷 捷彦  
株式会社メイク 角谷 俊彦  
吉野 壮太  
吉野 雄太  
ほちょうき工房ヨシノ 石谷 博司  
犬鳴山温泉 み奈美亭  
犬鳴山温泉 不動口館  
貝戸組 貝戸 喜廣  
社会福祉法人和泉の国 エルダーケア  
塩谷 幸次  
古谷 哲夫  
有限会社 アトラス  
古谷自動車工業(株) 古谷 博  
小北歯科医院 小北 雅史  
夢あかり 北浦 秀樹  
松浪会計事務所  
長滝連合町内会

泉佐野ロータリークラブ  
関西国際空港ロータリークラブ  
関西国際空港ロータリークラブ  
関西国際空港ロータリークラブ 横河 信治  
りんくう泉佐野ロータリークラブ  
泉佐野中央ライオンズクラブ  
スターゲイトホテル 関西エアポート  
新家歴史研究会  
馬場会計事務所  
(株)角谷保険事務所  
古谷 伊佐雄  
永井 和男  
向井 正一  
(株)イーネットホーム 安松谷 修司  
サンライフ幸  
Hokule'a OluOlu 川本 壮一  
喜種オート 喜種 保行  
FAVOR 西村 政彦  
株式会社 大浅建設  
森下へム加工所  
塩谷 善一郎  
匠瓦葺工業  
永井建築  
工房家具世界  
(株)エムズビーン  
株式会社 泰西鴻業  
旭区・八尾山本謡曲教室  
水野産業株式会社  
高安ルーツの能実行委員会  
ピアノパー岡本  
永兵 永井 悦男  
蟻通神社 世話人 木戸 正行  
蟻通神社 世話人 仁井戸宏志  
蟻通神社 世話人 大北 好輝  
蟻通神社 木戸 聖子/木戸 紀子  
蟻通神社 木戸 睦晃  
ありとほし薪能実行委員長 吉野 勝

第7回  
2022

# ありとほし薪能

蟻通

歴史文化遺産都市・泉佐野

Chinese Restaurant

## 桃李 Toh-Lee

中華料理「桃李」は、旬の食材や泉州・近畿地方の素材にこだわったメニューを取り揃えています。旅の前後のお食事やご友人・ご家族・大切な方とお食事の機会に是非ご利用ください。



### ありとほし薪能(第七回) ご挨拶

今年も ありとほし薪能にお越しく下さいまして有難うございます。台風被害に、コロナにと、翻弄されながら第七回を迎えることができました。

今回は、船弁慶をご覧いただけます。大河ドラマでは菅田将暉くんが演じた九郎義経の記憶は、壇ノ浦や奥州といった土地の記憶として現代に語り継がれています。

ここ蟻通神社も紀貫之の和歌に、清少納言の枕草子に、鈴木春信の浮世絵に、そして世阿彌の謡曲にと、土地の記憶を語り継いでいます。

聞くところによりますと、大和川から南でお能の定期講演を行っているのは、阪南の皿田能と、このありとほし薪能だけだそうです。これもご覧いただける皆様、ご協賛各社さまからのご支援、また泉佐野市を始めとする来賓各位のご後援のお陰と厚くお礼申し上げます。

今後さらに10回20回と続けて行き、長滝の故事を語り継いで参りたいと願っております。皆様方には、ますますのご支援をお願い申し上げます。ご観覧のお礼の言葉とさせていただきます。

ありとほし薪能実行委員長 吉野 勝



# 能 船辨慶

観世流 ふなへんけい

季十一月

- シテ 山中 雅志○
- 子方 吉田 学史
- ワキ 原 陸
- ワキツレ 原 大○
- アイ 善竹 忠亮
- 笛 野口 亮○
- 小鼓 古田 知英○
- 大鼓 辻 雅之○
- 太鼓 上田 慎也○
- 後見 梅若 基徳○
- 塩谷 恵○
- 今村 哲朗
- 地謡 下川 宣長○
- 吉田 篤史○
- 藤井 丈雄
- 上野 朝彦
- 伊藤 裕貴
- 梅若雄 一郎

○印は重要無形文化財総合指定保持者

# 狂言 鬼瓦

おにがわら

- シテ 善竹 忠重
- アド 牟田 素之
- 後見 小林 維毅

訴訟のために故郷を離れ、京の都で長らく滞在していた大名ですが、ようやく一件落着し、晴れて故郷へ帰る運びとなりました。これも常日ごろ信仰する因幡堂薬師如来のおかげとお参りに出かけ、国元にも薬師如来を安置する堂を建立しようと思いい立ちます。そのためには、お堂の外観を見学する内に大名の目は鬼瓦に釘付けに…。

当時は地方裁判所がありませんから、訴訟をするためにはわざわざ都へ上らなくてはなりません。今で言うと同身赴任くらいのイメージでしょうか。長い間会えなかった「鬼嫁」ならぬ「鬼瓦嫁」への愛おしさもひとしおです。夫婦の情愛が描かれ、誰もがほっこりとする名作です。

ワキ、ワキツレ次第「今日思ひ立つ旅衣、  
く帰洛をいつと定めん。  
ワキ詞「かやうに候ふ者は。西塔の傍に住居する武蔵坊弁慶にて候。  
さて我が君判官殿は。頼朝の御代官として平家を亡ぼし給ひ。御兄弟の御仲日月の如く御座候ふべきを。ゆひかひなき者の讒言により。御仲たがはれ候ふ事か。えすがえすも口惜しき次第にて候。然れども我が君親兄の礼を重んじ給ひ。  
一まつ都を御開きあつて。西国の方へ御下向あり。御身に過ぎなき通りを御敷きあるべき為。今日夜をこめ淀より御船に召され。津の国尼が崎大物の浦へと急ぎ候。  
ワキ、ワキツレ二人サシ「頃は文治の初めつた。頼朝義経不会の由。すでに落居し力なく。子方「判官都をち近の。道狭くならぬ其さきに。西国の方へと志し。  
ワキ詞「御急ぎ候ふ程に。これははや大物の浦に御着にて候。某存知の者の候ふ間御宿の事を申しつけうするにて候。いかに此屋の主の渡り候ふか。  
狂言「誰にて御入り候ふぞ。ワキ「いや武蔵にて候。  
狂言「さて只今は何の為の御いで候ふぞ。ワキ「さん候我が君をこれまで御供申して候。御宿を申し候へ。  
狂言「さらば奥の間へ御通り候へ。御用心の事は御心安く思しめされ候へ。  
ワキ「如何に申し上げ候。恐れ多き申し事にて候へども。正しく静は御供と見え申して候。今の折ふし何とやらん似合はぬ様に御座候へば。あつばれこれより御かへしあればと存じ候。  
子方「ともかくも弁慶はからひ候へ。  
ワキ「畏つて候。さらば静の御宿へまゐりて申し候ふべし。  
ワキ詞「いかに此屋の内に静の渡り候ふか。君よりの御使に武蔵が参じて候。  
シテ詞「武蔵殿とはあら思ひよらずや。何

のための御使にて候ふぞ。  
ワキ「さん候唯今参る事余の儀にあらす。我が君の御説には。これまでの御参かかえすがえすも神妙に思しめし候。去りながら唯今は何とやらん似合はぬやうに御座候へば。これより都へ御歸あれとの御事にて候。シテ「これは思ひもよらぬ仰かな。いつくまでも御供とこそ思ひしに。頼みても頼みなきは人の心なり。あら何ともなや候。  
ワキ「扱御返事は何と申し候ふべき。シテ「自ら御供申し。君の御大事になり候は。留まり候ふべし。  
ワキ「あら事々しや候。たゞ御とまり有るが肝要にて候。  
シテ「よく物を案するに。これは武蔵殿の御はからひと思ひ候ふ程に。わらは参り直に御返事を申し候ふべし。  
ワキ「それはともかくもにて候。さらば御参り候へ。  
ワキ詞「如何に申し上げ候。静の御参にて候。  
子方「いかに静。此度思はずも落人となり落ち下る所に。是まで通々来る志。かえすがえすも神妙なりさりながら。はるばるの波濤をしのぎ下らん事然るべからず。先此度は都に上り。時節を待ち候へ。  
シテ「さては誠に我が君の御説にて候ふぞや。よしなき武蔵殿を恨み申しつる事の恥づかしや。返す返すも面目のうこそ候へ。  
ワキ詞「いやくこれは苦しからぬ。旅の舟路の門出の和歌。唯一さしと勸むれば。シテ「其時静は立ち上り。時の調子を取りあへず。渡口の郵船は。風静まつて出づ。  
ワキ詞「これに烏帽子の候召され候へ。物

着。  
シテ「立ち舞ふべくもあらぬ身の。地「袖打ち振るも。恥かしや。舞シテワカ「唯頼め。しめちが原の。さしも草。地「我世の中に。あらん限りは。シテ「かく尊詠の。偽なくは。地「かく尊詠の偽なくは。やがて御代に出舟の。船子ども。はや續をとくく。と。勸め申せば判官も。旅の宿を出で給へば。シテ「静は立く。地「烏帽子直垂ぬぎ捨て。涙にむせぶ御別。見る目もあはれなりけり。中入間  
ワキ詞「静の心中察し申して候。やがて御舟を出せしつるにて候。  
ワキツレ「いかに申し候。  
ワキ「何事にて候ふぞ。  
ワキツレ「君よりの御説には。今日は浪風荒く候ふ程に。御逗留と仰せいだされて候。ワキ「何と御逗留と候ふや。  
ワキツレ「さん候。  
ワキ「これは推量申すに。静に名残を御惜あつて。御逗留と存じ候。先御思案有つて御覧候へ。今此御身にたかやうの事は。御運も尽きたると存じ候。其上一年渡辺福島を出でし時は。以ての外の大風なりしに。君御舟を出し。平家を亡ぼし給ひし事。今以て同じ事ぞかし。急ぎ御舟を出すべし。ワキツレ「げにこれは理なり。いつくも敵と夕浪の。ワキ「立ち騒ぎつゝ舟子ども。地「えいやくと夕汐に。つれて舟をぞ出しける。  
狂言シカジカ  
ワキ詞「あら笑止や風が変つて候。あの武庫山蘆葺絃羽が嶽より吹きおろす嵐に。此御舟の陸地に着くべき様もなし。皆々心中に御折念候へ。  
ワキツレ「いかに武蔵殿此御舟にはあやかしが憑いて候。  
ワキ「ああしばらく。さやうの事をば船中

にては申せぬ事にて候。  
シカジカ「あら不思議や海上を見れば。西国にて亡びし平家の一門。おのく浮み出でたるぞや。かゝる。詞「時節を伺ひて。恨をなすも理なり。子方「いかに弁慶。ワキ「御前に候。判官「今更驚くべからず。たとひ悪霊恨をなすとも。そも何事の有るべきぞ。悪逆無道の其積り。神明仏陀の冥感に背き。天命に沈みし平氏の一類。地「主上を始め奉り一門の月御霊霞の如く。波に浮ひて見えたるぞや。  
後シテ早笛「抑これは。桓武天皇九代の後胤。平の知盛。幽霊なり。  
地「声をしるべに出舟の。早笛 く。  
シテ「知盛が沈みし其有様に。地「又義経をも。海に沈めんと。夕浪に浮べる長刀執り直し。巴浪の紋あたりを払ひ。潮を蹴立て悪風を吹きかけ。眼もくらみ。心もみだれて。前後を忘るばかりなり。舞働  
子方「その時義経少しもさわがず。地「その時義経少しもさわがず。打物抜き持ち。うつゝの人に。向ふが如く。言葉をかはし。戦ひ給へば。弁慶おしへだて打物業にて。叶ふまじと。数珠さらくんと押しもんで。東方降三世。南方軍荼利夜叉。西方大威徳。北方金剛夜叉明王。中央大聖。不動明王の案にかけ。折り折られ悪霊次第に遠ざかれは。弁慶舟子に力を合せ。御船を漕ぎのけ汀によすればなほ怨霊は。慕ひ来るを。追つばらひ折りのけ又引く汐に。ゆられ流れ。また引く汐に。ゆられながれて。跡白波とぞ。なりにける。

と不仲となつた原因は、頼朝の許しを得ずに朝廷から官職を得たため、など様々ありますが、能では「つまらぬ者の讒言」すなわち告げ口だとしていいます。義経一行は、今の兵庫県尼崎市にある大物の浦から西国へと船出しようとしていいます。弁慶は、それまで義経とともに来た義経の恋人・静御前を都に帰すように、義経に承知させます。ここでの静御前の美しい舞は、義経とのこの世での別れを覚悟しながらも、義経の前途を祝福する内容となっていて、当意即妙の歌や舞を即興で披露する白拍子ならではの芸を見せる場面でもあります。

後半の海上の場面へと展開するところでは、狂言方演じる船頭が大活躍です。船をこぎながら弁慶とやりとりする内に、にわかに波が荒れ狂い始めます。必死に棹を操る船頭の所作が、大鼓・小鼓が打つ「波頭（なみがしら）」と呼ばれる激しい演奏とともに、波風吹き荒れる不穏な海を現出させます。そこへ登場するのが、義経に恨みを持つ、かつての平家の総大将・平知盛（たいらのとももり）の亡霊です。刀を抜いて立ち向かおうとする義経を弁慶が制し、弁

慶の法力で知盛の怨霊を退散させるのでした。  
本曲は、そのわかりやすいストーリーや見た目の華やかさから、現在上演されている能の中でも指折りの人気曲です。美しい白拍子の静御前と、阿弥の名作《井筒》のような、静かですっきりとした雰囲気のある曲とは随分と趣を異にしているように思われるかも知れません。これには、本曲が生まれた時代の能を取り巻く環境も大きく影響していると言われています。

た当時の観世座でしたが、激しい動乱の時代を迎えます。畠山氏の相続争いに端を発した応仁の乱によって、都は戦乱の渦中となってしまい、これまで能を後援していた貴族や将軍家、寺社は力を失います。能は生き残るために、かわって力を持ってきた商人たちなどの庶民階級に観客の裾野を広げてゆかねばなりません。信光が能を作っていたのはそのような時代だったのです。様々な人に喜んでもらえるものという思いが、誰もが知るヒーロー義経と静御前の愁嘆場を描いたり、平家の総大将・知盛の怨霊を登場させたりといった盛りだくさんの《船弁慶》というエンターテインメント作品を生み出しました。

## 見どころ解説

### 船辨慶 エンター テイメント

本年の大河ドラマ『鎌倉殿の十三人』でも描かれた戦の天才・義経の切ない末路は、皆さまのご記憶にも新しいのではないのでしょうか。「判官最前」という言葉も生んだ、悲劇のヒーローの人気は高く、様々な文学や演劇の題材となっています。能《船弁慶》も、義経、その恋人である静御前、そして、武蔵坊弁慶といったお馴染みのヒーローやヒロインが登場する曲です。  
まずは、能《船弁慶》のあらすじと舞台の流れをご紹介します。

時は文治元年、一一八五年。その年、源義経は壇ノ浦でついに平家を滅ぼしますが、その華々しい活躍にもかかわらず、兄・頼朝との不和のため、武蔵坊弁慶をはじめとした家来たちを引き連れて都を去ることとなります。義経が頼朝



本曲の作者は、室町時代の  
大鼓の名手であり、能の作者としても名高かった、観世信光（かんぜのぶみつ）という人です。信光は、あの世阿弥をもしのぐ人気役者であった音阿弥の第七子として生まれました。大スターである父・音阿弥の活躍で安泰に見え

橋場夕佳先生 ●プロフィール  
東邦高等学校教諭。博士（文学）。国語科教員として教鞭をとりながら、能楽の研究、解説などによる普及活動にも携わっている。名古屋を中心に能楽公演前の解説やイヤホンガイド（同時解説）を行う。